

文恭院實紀

二十六

庫	文	閣	内
三函		三六〇六	和
一四架	五五冊	四號	書類

庫	文	閣	内
四九函		五五〇五	和
一五架	五五冊	四號	書類

寛政十一年己未  
自正月  
至六月

内閣文庫		
番號	和 36064	
冊數	55 ( 26)	
函號	149	36



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





文恭院實紀

二十六

寬政十一年己未  
從正月  
至六月



文恭院實紀

二十六

寛政十一年正月五日

文恭院殿御實紀卷二十六

寛政十一年正月五日始 御齡二十七

寛政十一年己未正月元日群臣拜賀例の如く

日立基



二日舊し同

三日又同し午牌より吹上の園より

如夜謡曲始め恒例の如く

五日濱の庭園より

六日僧侶初皮等拜賀例の如く



一免阿の既方のまはく時辰を初ふ  
七日菰菜の佳か笑例のま、初る伊勢代系使言  
家前田信濃守長祿京の中條山城守信復日光  
八宮系守のち義潔共よ西博の伊保り守る  
りてあつてまふ物相景色よ同

八日东叡山

叡有院殿

澄明院殿雲廟子松平伊豆守信明代系

九日三月一日赤城のおり多射一富士時辰  
をいふまふ

十日东叡山

大猷院殿

叡有院殿

澄明院殿雲廟子赤城より

常憲院殿

有徳院殿



孝恭院殿西臺御兼よ

源徳院殿

至心院殿西臺牌下よ詣りて

十一日具是の由祝例より連歌始めあり

杉よみよ一のしきを法正の代始書昌逸二点

之のとりは鶴女その庭清白池水は龜の尾ふ

りき日始りて昌寅群臣餅酒をいりりり

例よおれ一奏者葛植村強河守家長が社めを

初を兼中真書出屋長三郎正侍少姓銀林友之

直<sup>直</sup>生英西域書院書玉虫八尾系の千茂供書と

ありこの日吹上りて水弓物始の式行りき

を雨よより淹滞きくる

十二日三縁山

懐信院殿靈廟よ太田備中守資慶代系に

の日暮雪降りり例の如く三家のうとく

及女子とも供きりき



十三日西菅西の追放尊せしる厚金管厚獲

かふ

十四日三縁山

又昭院殿靈廟より戸田系女正氏教代迄

十五日月ふくみ有祭例の如し僧侶祠安有祭の

者多し山王の社へ山側大久保寺前等忍温水

供して太刀金を教を薦せしるありし十三

日湯成乃おし多射し事士時ふくを御ふ少老

堀田様御書正教は寛政以来の諸家譜編集重

立取調乃り命せしる同族奏者堀田寺前等

正教も同し御様御書正教は差違御しむし

と仰付しる

十六日勘定事り石川左近右衛門房目付御大

庭左衛門正養供當大河内吾々傍御事勘定

吟味役三橋左衛門成方左下柳美地の子御

付しる去りし十七日雨ふりし十八日の射



場始め阿の射色のもの出座の物禄例のふ

と世に傳ふの延射色のもの阿の射れを忘却  
せしとていふにき未嘗有の事ありとそ

十七日 御宮

御宮より詣り

大納言殿よりおあり

十八日 濱の園庭より出座あり 田安・橋あり

も陪拵せしむ一町の射場はしめしむ

り其師小笠原信次郎持齡より射色の書

士十人おのゝ金をしる

十九日

大納言殿よりおあり

二十日 東殿山

大猷院殿

有徳院殿 靈廟より松平伊豆守信明代系

二十七日 山善清甲府勤番より大書よりもの四

人代安内方清五郎恒忠珠砲玉茶をり余を



る

二十三日風烈くくくして海石を吹あけ天色蒼  
は吳水に波のうけのこゝわくぬまてよあり  
くとそ

二十四日東叡山

孝恭院殿靈廟より少老京極侍前書言久代系  
流言家言京極のち義潔日光山より湯獨  
日山よりうくくれくくハ言家戸田侍後書

氏倚して慰勞せしはさ如。三縁山

台徳院殿

又昭院殿

有章院殿

惇信院殿靈廟より詣あり

二十五日此巻の白言調理を命をくれくくよ  
り三家の方く庶流湍法所司代大坂侍代普  
弟の草屋写諸奏者書菊写縁法父子をくく







うまかり是匹の勲勞を褒むべき金一枚を物ぶ  
與右首尾習ふ秋康幸院 西陣の本職とふ  
るこの取築地跡塔中火あり

二十八日月あま佳祭例の如し宿老戸田来女  
正氏教安後對する信成伊保して一橋中細云  
治添御事及多年而痛務におほしまた取子  
く清々、まゝ、諸務而免はり是迄物りり  
一宿料ハ民部ハ存敷ハ、まゝ、れ一

傳ふまの事徳川右幕の督存匡ハ、宿老太  
田備中書資也、して信つらハ、つるに此日中細  
云治添ハ從二位右細云、而昇色、阿り、よりて  
治添存敷存匡三ハ、まゝ、り、而對面、阿りて  
謝、まゝ、又治添ハ、特者もて、米五  
万俵、お、く、を、戸田来女正氏教所目代  
引海、の、まゝ、京、の、略、物、り、而、自、つ、ら  
り、母、織、物、不、京、不、目、代、物、珍、備、前、書、右、精、赴、任、の



あつまり備前正盛の弟乃よる金時少く御  
織を下つる又峯首を初りて宮家の供をよ  
いま玉の僧徒巫祝等々くくそまづ。日門へ  
本月市祈禱の料張る程時少く十日ハハする  
所供ハ言家才條河内守伝義新。この秋成  
乃牌築地鉄砲海邊大火又神田三河河邊も  
火災あり後。福倉河原市街を十町をりり  
繰り行回所の住還廣く。とそ。

二十九日三縁山

有章院殿靈廟は太田備中守資忠代系に  
此秋の火災より。三家供。そ。り。ま。何。ふ  
この。黄昏のころ築地龜島河邊。火  
災あり。とそ。

二月朔日白木書院は虫初。日光久能。高。山。の  
湯鏡の餅符録。つ。う。と。う。日光門。主。供。僧  
凌雲院僧正徳考。その。地。宮。ハ。跡。乃。供。者。山。門。松。



代日光山拵代上野一山僧中その外名宗のとも  
くくみくをふ又言家前田信流寄書祿伊勢よ  
りうくく詣にこの日々ううう雪降る出てじ  
福もに止すあまうてハ霰まうりよるう  
昔宗よそあくる 妻よ侍る処去来の大海ハ  
進能うてあけの元旦ハ立妻れ  
りめてううりーと 諸人よろこひーとそ  
二〇 濃の庭園よあくるきくる暗ハ羽提ゆるき  
ーとそ

四〇 愷子代君引福のうはーめてまうりふ  
られ後園よーてあ對面ありあ自つうく伯耆  
玉廣笑のあ程うー のあけの元  
大納云殿うー白浪の雪燻 鶴  
墓のよまハあ京毫三まうくをくは又尾張大細  
云宗睦の供して三程ニ子足愷子代君よハ太刀  
全る資巻物五をまうくをうるまうー二〇 湯成の  
おりあ射しあ士時ふくーまうふこの日供あうて



松平加賀守治脩へ書付提の雀をつらハヤる

五日このふ愷子代君まう乃なりぬい沙對面あ

うしよすり

御所より安後對する信成西城よりハ水野由

御書右友

墓の上より中山長門守信教して愷子代君よ

御所より卷物十二程子足西城よりハ卷物五二

程子足後園よりハ二程子足大納言宗睦のよ

御所より二程子足西城より同日後園より一程

つ、淑姫君よりハ一程あり

又聖聰院尼の方へ

有御所より

墓の上より一程子足淑姫君より一程まうせ

るまて大納言宗睦のこついの謝とてまう乃

ありき老臣よ福へ退てくる愷子代君ハ松平

彈正大弼務當して同く謝してまう乃



まも若老下溜一退く水戸五郷同一子謝一使  
まゝとくくる家合指揮き一秋山十石束の正並  
福免此この日寫合神保在系茂常家子毫らし  
めゝふふハニ一てじみきとると中婦女歌のよ  
よて其方家士崎山平内へ子負き一ハ崎山産他  
と中もの、妻子のよ一とさよ一産他言方よ勅  
一以平内その他七人よて殺害よ及一つとき搜  
索乃廟りよ一よよりさくじの始末よ日玉水り

一軒家士はまよろくくさう、おとお夢へ湯乳  
明をも遂させらるゝこの処過去のよりよよりて  
その水さくとも及りきましくとの所せめれり  
七日戸田系女正氏教所日代牧野備前守右精  
京師費足よよりみへを京

八日赤飯山

渡明院殿靈廟よ安座對する信成代系以  
此日新奠よより伊側白頭甲斐守政雍一して







十一日 三縁山

信位院殿無量殿より太田備才守資忠代系に

十三日 濃園より出遊あり鴨敷多あり松平

後守赤宣父政任上総介重豪へ書提の在つ

りつゝる

十五日 月ふみのお祭例より一 大久保安藝守

忠告りしめ就封乃晦めふまの九人知恩院方

史乃使信りしめ幸ふの僧徒祠人等そのお祭

近日先づまこと正上京よりより太田備才守資

忠より白銀五兩板銀三兩把

大納言殿より水野出羽守忠友より浪三郎

板

墓の上より硯箱ちりめん三十卷つらり

内りし十三日 湯成のあり鳥射し書士時

をいづる

十六日 山普信あり松平澄路守信新目付羽太



唐尼多門正養劫定冷味没小笠原三九郎長  
幸在齋山

宝樹院殿

長昌院殿靈廟その他修理の事なり  
みよりおのゝ金時ふくを物ふ屋吏初相  
けり

十七。御宮

御宮に安藤對する信成代系に増す方丈丈

病より致仕の事清りりともおのゝあき  
ふりをち社の有りしを傳へる

十八日吹上花園よりあきをれまより一橋邸

よりあきをる

十九日太田偏中より資志と社の有り相平周

防吉康定劫定なり石川左近將監忠房左殿

山法會のちりふよりあきよりおのゝみ

あき



二十日 东殿山

孝恭院殿二十一日御忌法會初日より安  
後對馬守信成代系戻同よりみより三家の  
方とせよとも供まいつとを言家法危奏者屬ま  
うのりり出々しき句ふ又同山乃  
乘基院殿靈牌下り此側平忠美法守親長代系  
此言家中條山城守信復系より响謂に  
二十了。

孝恭院殿法會中より立花出雲守親周  
して日門は槍をまゝくくせりま及拵留り  
めその他のともくくし御懸旨あり又三家の方  
と供出して此の例はまゝを二十葉をま  
らる  
二十了。此法會結終より安蘇對馬守信成  
代系戻この日此側白須甲斐守政雍して日光  
の跡孝院法親王より冰糖一壺を供りりさる同



一及びより三象の方と在りとの供まひりて  
湯起居を候しなる事

二十四日

孝恭院殿雲雲廟湯詣あるしきよいつてり湯  
感冒より安んず對言り信成代系後よりて  
三象の方と湯しき同ふすと太田備中守資  
堂湯供し湯法會をてより檀觀とて  
日下張三郎板十きりきりるうの僧中

一月一報時女くきりりる事

二十五日湯法會をてより三象ののしき  
はしめ群臣皆堂堂して宿老の謂し退く紀  
伊郎よりハ供はつす総督太田備中守資堂  
みくをり時ふく七をさつりる事門切自  
湯の既必領市尾東の正為具足なり後次郎右  
後正杖老免して小普請よみおのく金と下  
つてその自勞を度せりる



二十六日 東嶽山

至心院殿靈牌所より安藤對馬守信成代を以て  
又

孝恭院殿法會乃より有りける社の有り  
松平周防守康定勅定の有り石川元近將監  
忠房みより有り同嶽山の警備しける。お井能  
光吉利貞も同

二十七日 歳暮の時彼くそまつりし三家の方

こはしめ例のともくくある新守松平孝後守  
赤宣父政は上総介主豪の御内書を御ふ西嶽  
よりハ守書れり御例言并形強守清宣養子  
勝之丞 新よめりしことまで西嶽山姓とふ  
り廩米五石俵しるふ

二十八日 月あみあ祭例の同嶽大坂城代松平  
右京亮輝延赴任の暇を以て御前玉久光の  
御刀を時かく二十を下さる少姓組書院久世







孝恭院殿沙法會のより勤めりしよりおのく  
时报しつるふる表右草のともりし銀を下るる  
三十日日光のまじりて

孝恭院殿沙法會縁をりしより上京より  
よりまりのりしより座ありて沙對面あり  
りしよりつりし伽羅物より馬車書院より食せ  
られしより庫純子十卷編子八丈<sup>丈</sup>縮各二十反  
よりしよりきりしより同し縁云末有りし交代券合山

崎主税助義徳全時ふく御藏家合匠上領玄碩  
利峯全時ふくおじおよび信存乃標伽院みく  
たてまつりしより、僧正院家其他僧中坊安  
家自等御獨りて食給ふ

三月朔日工巳の沙税とて三家のよりし  
供し一程一程のりしよりこれ日光の玉同  
く二程一程ありしより

下。...



勅院使府より入りて大田備中守資愛して  
尉勞をくくる言家中條山城守信復跡をきり  
内及能吉守政昭三河守矢他橋助役の多命を  
りり  
三日 槐笑親の如し  
四日  
勅院使引見よりて湯治普弟の孝言家厚等諸  
奏者等父子まうのゆるみ表へ出まして

勅使勅修方前大納言經逸のち程前中納言有政  
院使西洞院守お信庸のち對面あり家首の  
沙祝とて  
禁裏より太刀目録重三枚  
仙洞より同く金二枚  
中宮より一枚をきりて接家勾當の内侍  
者各太刀目録たけみりてそまうり又



勅院供ハ自のお祭ありつゝさよそのお祭士等  
人搦代冠帽末廣師吉田三位の供ありあつて  
みふお供いけて足くはそまつふさうく

勅院供のもとは高家六角主殿院廣胖して  
例の如く陸路一画橋一茶つゝを流うハさる  
まゝ有る多部大補廣妻して田のまゝは明  
け乃日申楽信付くまゝよすうまう乃りり親  
覧しあふはまゝすい信つうりらる同しを尾水

まひも沙供よそ傳つゝる

五日公の養意の申楽何り大廣写し出してま

い

勅院供三家のうゝく沙對面をくまをて

楽をくまの能徳ハ翁三書更加茂後西り様

黒塚祝云弓八幡様云靱猿骨皮あり出のまよ

く奏者書して大まへへ唐織纏尻をくま

要脚廣蓋くまのりるり同し席くま



養意も例の如しこの日御園で前右大臣賞季  
公到着より言家宮内長門守義潔潔にて尋  
問せしむる

六日父死して家つくもの十人

七日

勅院使辭見より濁語譚弟のとより言家  
諸流奏者言父子より乃り乃して沙表より  
りをぬか公の沙對面より沙區洞行きし

き悔途の暇をぬか初子の勅修ちる程は銀  
三石枚繰る把つ

大細云敷より百枚面洞院より枚繰る把

大細云敷より五十枚つりきその他接家室

の跡の使者公の家士五人搦代冠帽末廣師

よ玉より浪時被下り

墓の上よりハ留中居當山田佐渡

く



勅院供へ時ふくをいふ

八日 东叡山

清明院殿靈廟より松平伊豆守信明代より日

一山の

蓮光院殿靈牌所より清側より并飛騨守清宣代

系凡

九日 具能あり涼大夫敷盛績鼓輪銅 空 傷 櫻川

取討者我乱狂云ハ三人夫比丘真堂ぬり武悪

骨皮れり

十一日 紀伊中納言法室口系府よりよりうのり

らき清對面あり太刀根五ヶ敷ちりめく二十

卷をくきくき耐斗咆をいふ尾水南門水世子

も同じく對面をくき紀の家士もあふなり大

坂城代引渡の小姓組番頭久世丹後守廣氏痛

まきり永見伊豫守為貞よかへ命をくき味か

ふ物城小姓組番頭佐野紀前守義行を城よ



うつり百人組の比津田山城守信久西城小  
姓組取れ少納言海峯之丞実茂子為次郎  
初見の礼をとる

十二日三縁山

信長院殿靈廟に安藤對馬守信成代迄行

さ

勅院使府を尋し途より

十三日

湯屋所兼淑姫の方湯園に出遊あり

十四日大書廻田少左衛門亮民部方相取と

れ

十五日月ふく佳祭例の如し松平を後する

齊宣就封の味しつうじ湯をとりたる松平右

京大夫亦賢松平右衛門の仇亦亦系親近江守

山門諸堂社修復助役たるより上松平

正大弼治廣木下治政守利彪とくたるよりお



のく、時ふくをぬふ、渡勢尾三玉及在海尾川  
渠渡利をく、劫定なり中川、飛騨守大英目付  
横田十郎を勝延和劫定、吟味役大久保内膳  
大宮三河五矢他橋梁をく、他子なり三  
上因幡守季寛およひ、厨吏等帰詣、甲府勤  
嵩支配滝川書、つり利流

禁重近所曲測和泉守、京露駿府勤嵩、与既  
横山久在系、一貞とも、赴任のいと、まあふ

初物規め、ゆ、その他、僧侶、相友、相濁、以

十七、紅毛山

御宮、安藤、對子、古伝、成代、系、凡、二、の、日、吹、上  
花圃、よ、て、大、的、祝、め、ふ

十八、白、山、名、川、は、と、り、ま、あ、く、き、き、維、子、七、相  
ゆ、ま、ふ、厨、不、ハ、一、橋、郎、別、野、出、よ、て、釣、り、成  
牌、よ、て、還、御、れ、る、家、合、生、弱、定、後、矩、子、権、之  
助、後、興、を、く、め、父、孫、付、て、家、つ、く、若、丸、入、直、江、河



山門諸堂社修復助役の家士等浪時後羽織哉  
かふりたるあり

十九日白木書院へ出しつゝいふ園を前右大  
后賞季公まうぬりつ終鏡をかきし終緬  
浪子代後園へ紅白うりめんをまいつを湯對  
面をく後家士等つゝをその旅館へ言家  
前田信濃守書院へ浪雀と稱すておく  
せ

二十日日光へまうり山の梅花をまいつを

二十七日五子のふとりへ放鷹とてふを  
らる湯巻の雛子十才里安地へは書か多  
丹下繁文始書士小普徳の筆の袍裾は寛ありぬ  
園を前右大后賞季公味くまうり言家大次下  
野宮基季年へ物物浪三る枚録二る把  
大納言殿よりい言家大友因幡守義方へて武



百枚後閣より八時後十つくりとてその家人  
等も浪時指をくくくく招平下徳る丸和  
二九向修復助役余をくくく

二十七日こ乃ふ王子の造り成のおり丹里乃皮  
地よりと炮粥の業所覧より供書本多丹下  
繁文より酒吸止のを物じぬ城納産者根弥三郎重  
辰小普請茂野を右弟門智利ハ布帛二反つ、

下たる日物じぬ城納産者根弥三郎重

二十四日赤飯山

孝恭院殿靈廟より塘田接津より正敷代を火  
消役室祭を存正繩百人組の次とある裏の  
切手書の前乙幡字を傍を老免して小普  
請とある儀金を御ふる社の年り出井大炊院  
利厚植村駿河守家共して増上の方丈丈智堂  
痛よりと清くくくく退強のより信つらさ

るよりと清くくくく退強のより信つらさ



二十五日水戸寧お治保心申お治純心乃もと  
へ松平伊豆守伝明安後對子守伝成治侍  
くあつゝの清りれしやう、申お治純心安後の  
治子を英之允もて嗣子の子位りりいささ  
ふよりして在子代と改稱せしむるよりてあつ  
まうはりり謝しなむる尾純のあつゝの家士  
百てその子なきをいふ又尾張家の家人め  
てちうくく、淑姫君治子にせよおよ對面ある

つぎに傳ふ

二十六日あさこゝ園方前右大后賞季公貴後  
あり  
二十八日羽城少姓組番士小笠原桂九郎伝時  
のあつゝ家せしむる  
二十九日戸田米女正氏教所目代引渡のあつ  
てい歸り福えは茶守信十及よ魚そくて飲し  
ある



二十日劫定有り柳生主様正久通他子有り神  
保修後中長光小普請有り松平澄路守伝行目  
付松平田宮業隆二丸向修復乃有有りしよ  
しおのく金時指を初めその他所属の普請  
相差有り又主様正久通ハ在江國山の諸社社  
三河小矢他橋普請の有り有りしよしよしよ  
く初め他子有り三上因幡守普寛同ハ有有り  
て金を初めその他所属の有り有り先自ら

此か後玄蕃初陳火絨捕盜の有り有る

四月朔月有みお突例の如し松平筑前守齊  
廣系親に水野日向守務起孝子六右衛門孫別  
初見し有み松平加加守守治脩就射の味し  
い有るを下りて有合火災巡視有りしし  
部盛本火消役と有る依後有り山本守与守茂  
孫赴任のいとまあり初物旧は替りてあり  
戸野子代の方才相治紀伊の嗣子と定めし







支御所へ同

墓の上へ一種子止まらば

二日尾張大納言宗睦公より乃々々々  
りして御對面ありて之を淑姫君より同く  
對面せらる

三日依後守り給ふ所吉正義養子止まらば正  
目付大守大次郎公美養子熊元公弼  
右  
孝細政萩原全十郎友政子己三郎友貞  
同

出精よりありありと出されて有る事  
御城

廣安用人の御井屋右衛門房貞子  
飛五郎房

先手筒院水野右衛門左衛門  
京方養子久太郎

淡炮方田村四郎左衛門  
重子熊太郎重寛二

丸留守居河内舍人胤庸子  
勇三郎胤祿ハ武技

出精より同く有る事  
大守為の山本文

尾張の時房子用之助時亮  
出精より増島為之

助信乃子金之丞位  
乃ハ學問出精より同



く大案より細工次第田舎在系の政良子主税政映  
ハ軍学小普徳方田丸新九郎主職子新在系  
の至純ハ学問共よ出精よより同く在出  
され小十人組よりきておのく廉米を下  
ヤリ  
四日家合久貝忠花傍の正満同列指揮家きくる  
この日父死して家つくまの三人  
八日东叡山

後明院殿靈廟より戸田米女正氏教代より  
此日凌雲院より一教宗院殿より一橋中將法の七  
田周忌法會より一三家の方より供して  
この日清側本領大和守泰行して一橋氏部  
以斎敷より檜重一組大細玄治海より千葉一  
連をつかさどる又清側白須甲斐守政隆して  
凌雲院より香資の浪十枚をくさるる  
九日濱の庭園よりあつとるるふれり合を



るハ万石以下有瑞ふよめともうゝ家系所出  
に〜と〜し其自は福〜れ〜今よ出さ  
ころもあ〜とす由こと〜の内出す〜と  
つ所さよ福〜れ〜菰をもて去〜午自さの  
身跡殊はくぬく志れつる身ハ不詳の文字を  
記す〜書物致焼〜て詳〜りあ〜は家  
傳の文を記〜又密ある身もあ〜ハ其旨封  
書〜て出〜文云ハ取め〜は彼名書よ

ても苦〜く〜は皮長の加草は〜く〜は所さ  
よ出さ〜孝ハ出さ〜及〜は實自以來去年  
よ〜の身もさ〜く〜と〜とあり不分明  
の身あ〜ハ堀田孫津吉正敷堀田冬前吉正敷  
より並よ尋問の身もあ〜ハけさハ皮長あ  
る孝ハ皮長と問〜ハけさハ心〜て有〜

〜とれり  
十日日光山



御宮代系使西城より子言承平田備後守氏倚  
雲二朝代系使志岐山城守杉布同山の惣祀在  
竹加納幸江守久周松平志摩守重方氣を  
れいとよめむ物物田の如し

十二日三縁山

惇信院殿高廟より大田備中守資愛代系尾表  
右草束條元十郎守資貞丸同職平兵衛又云系  
資貞貞丸の兄習と名る

十三日劫定在り才川形守守英目付横田十  
郎左衛門延和劫定吟味役大久保忠実流勢尾三  
五及東海尾川渠渡利乃守在りしよりおの  
しより序まで在りしより時給をわす員流  
郡代鈴木三郎正勝同しより勤しより全時ふ  
く物じその他劫定組代安守を始め属吏物相  
若阿り



十五日月あみの御祭儀の如し松平伊豫守治  
好始め宗親二十人鎌倉光昭守會海増守守任職  
命をさす大僧正に任せしむ

十六日山姓組番匠久世丹後守廣民病免して  
家令とあり

十七日御養心  
御室に御詣あり

十八日松平為狭守容任為重和泉守言疑松平

出羽守治守有守才務大輔頼貴上杉弾正大弼治

廣徳守右京大夫義和伊達守江守村善松平上

総介存政松平形孫守利考りしめ就封のいとよ

かふ数多ありし杉踏河守勝定系親は村少姓

組番匠郭一家令能勢範前守杉重平内膳氏良

共之火災巡視家々

二十日东叡山

大猷院殿靈廟及







少姓 細子川内 藤助

孫 三之丞

彦坂源

玄清元知子 小一郎 元書石系 松尾系門 廣寛子

四郎 左系門 廣族書院 葛三 写口郎 石系門 政晴

子 富吉 親政 小幡 孫市郎 玄宏子 次郎 助

條 隼人 俊尚子 作五郎 俊頭 八父の年 芳久門 藤

枝 子 子 新子 石出 子 子 富大書 組院 大久保 三

郎 右系門 大書子 源吉 右向 小山 新三郎 英本 卷子

氏 五郎 小幡 次郎 八尚 卷子 隼人 正五 小姓 組

阿部 四郎 玄清 次福子 岩次郎 彦坂 三大夫 紹芳子

慶之 助 紹頭 西城 少姓 組 安後 孫 右系門 定為子 孫

之 助 定 孫 書院 書院 杉 卷 孫 只郎 卷 口 次郎

西 傳 書院 書院 孫 三郎 右系門 正 卷 卷子 末五郎

正 五郎 坂井 左系 成 後子 千之丞 成 美八 藤 枝

出 精 子 子 同 子 子 出 子 子 子 子 大書 与 院

米津 梅干 助 成 福子 加 卷 五郎 政 祐 西 傳 少 姓

組 井 戶 助 助 弘 梁子 新 八郎 弘 最 西 城 書院 書 出



并幸以郎正恒子助太郎正勝ハ学问出精了  
く同く言出さる事少姓組横井七右衛門改  
徳子和太吉 川勝重四郎氏定子武三郎氏亮  
矢部安左衛門 子庄<sup>左</sup>右衛門 孫城少姓組  
小泉平之儀義利子求三義隆与山助解由祐  
右子新就祐妻金田新八郎正秋養子留之助正  
右書院書玉忠左之儀茂次子左吉茂主御丹新  
巫務秀子務五郎勝睦御傳書院書大久保三十

郎忠休子幸之助忠宣牛牛茂之儀正妻子之  
巫正福加屋森左衛門正脩子傳八郎方正ハ父の  
年方より同く言出されたり事少  
子新書建部隼之助賢政子千次郎賢族ハ父  
の勤勞藝技より同く言出されたり事大  
西博納戸組次下田幸十郎等英養子政次郎重  
盈ハ学问藝技出精より同く言出されたり  
事大勤之儀正興養子左京正栄福井徳之儀久



光子謙吉久及外平友之助 卷子庄三郎

杉原四郎玄清 子理三郎 海部久右衛門

河義洪子德三郎義勝杉原主信勝元卷子益子

勝貞山田春八郎安房<sup>通</sup>子稻吉安民石川十郎玄

勝忠方子平<sup>平</sup>之丞忠貞小十人 与院宗澤内苑助

榮妻卷良子八郎左衛門美雅ハ藝技出精ヨリ

田一くめ一出三三細戸細院佐橋忠右衛門佳

尾子十左衛門佳傳西城新書後部精忠<sup>卷通</sup>卷子集人

可櫻物方水正大吉正安子大助 大書坂部三

郎右衛門正忠子楠五郎正廣六注田小玄勝正武

子正三郎正忠右衛門忠久子六郎右衛門忠徳野井

勝戸田五郎左衛門忠久子六郎右衛門忠徳野井

三平正房卷良子正吉政舊少孫三郎右衛門言美

卷子多門言繁依橋儀言集住<sup>住</sup>方子弟之丞佳

永山平孫玄勝正卷良子九郎玄勝正誠真海若

八郎玄長卷子卯八郎玄彌伊庭口郎三郎金丘



子政次郎清方ハ父の勤勞よりめし出され共  
よ大書よりしきし十人忌本五郎右衛門正輔子  
源十郎 山田又花判為子流太郎 永木玄  
五右衛門正恒子富次郎正威岩室方右衛門正  
易孝子左一郎 松本喜三侯爵信子右膳  
尚和西條少十人林三左衛門房喜子清左衛門  
房教林徳助義隆子永五郎義清ハ父の勤勞  
より同く石出され共よ十人組よりしき

康米並に通しする

三十日三縁山

有章院殿靈廟より詣詣あり大僧正舎海任職  
後けりめその詣詣ありのあり  
五月朔日有あみ乃佳祭あり日の供して端午  
の詣祝として二種一荷をさす  
二日端午の詣祝として三家の方と始め万石以  
上並有本新ちより供して時役さす



子田祝の如し西城へも同し哉前不務山の城主  
小笠原お換書長教卒後其子お月丸長教を  
して送領二万二千七名を供りしむま  
の長教ハ故飛騨守長房の子にしてはしめ伝巻  
としふ安永五年十一月十五日初見しなり同  
お九年の十一月家継その冬叙書してお換書と  
稱しこの三月十日四十歳にしてうせぬなり  
この日西城へあつたききき焼湯覚あり

三日羅漢ちのほとり湯放夢ありて鷲水鷲よ  
し五位を招提しつふふお光京極侍前守言久陪提  
してより五位得らるし姓組書既松平筑後守定  
胤養子子五郎定澄西城し姓組与既本目久之丞  
正廣養子者十郎正之はしめ父死して家つく  
也の九人

四日吹上湯覚不へあつたききき三なり公乃裁判  
のさよまじし石ふ



五日蒲鉾の佳祭祝の如し

六日西城少姓御書院南部紀前守伝在平城は  
福。

七日敷く助君は此日と病は伏せしり此日の  
刻いくりまついようせめじぬ清と一四歳よ  
音楽をとりめりるり三日

八日六つじのりよ二家とのりりり及せ子致仕  
の方より供まつるを又蒲鉾言家存留諸事

此諸相取布衣以上の如きまうのりり清り  
伺ひ先片は濁し退く敷く助君は澄りて體の  
際と稱しきり

九日六の日未刻りりりり體の院の方東飯山  
凌雲院へおくり清りりりり又家合中根内孫氏良  
よその山のち清合きりり

十日東飯山

常憲院殿雲之朝は杉平伊豆守伝明代系は此日



體門院御牌前へ御成りり侍側為奉紀後書  
良峯代系代

十七日大書與氏石川口郎之儀其厚子清高了之儀  
其後とて小普清了の儀

十八日三縁山

信任院殿書三朝之安度對了与信成代系代

十九日三縁山

文昭院殿書廟之太田備中守資貞是代系代

十五日月次の祭儀の如し松平清高守定正始  
め就封の儀了りしもの三人隠岐守小普清を  
くいつる。松平清高守定親に小普清親  
の支配阿部大守正高守成山姓組書頭と奉  
る大書院建部内匠次政堅淺野左兵衛守長致二  
條成俊とて、神ノ湯尾守氏書士も同し後流在  
り給ふ新書正義系御代  
十六日那須元二人の儀もふ大書院部久石束の義



洪一子德三郎義務藝技出精より新のめ  
一虫さきし大富しの廩米或る苞ゆふ

十七日 卯 夢山

御宮

雲雲廟詣詣雨より延くる安後對り信成

代系片

十八日 癸 神あり雀龜後二人靜三山鳥帽子

折石檜尚麻羽云麻布井礎強後折屋に雷なり

二十日 东 飯山

大猷院殿

有徳院殿雲雲廟より折平伊豆守信明代系片

二十一日 卯 夢山

御宮及

諸廟より詣詣あり

二十二日 百人組の比小笠原若狭守成信小普請

組支配火消役酒井内記忠貞百人組の決り



又與之一家合戶田寬之丞氏寧田沼主水

意英後市丸少姓組堀又十郎右富安後以右弟

惟久立花大吾程以右城少姓組玉田右口郎盛

幸朝倉織之助孝昭權久五郎右門書院為東

條小孫太後源右言山平左弟右盛喬押田

兵庫務長水谷半九郎務實右尾亮太郎政温

警備押左弟右清典右城書院平塚幸次郎為長

後源右新島閔傳亮儀大書務長三郎右庸

小普清太郎波之丞好金子村政太郎輕見石谷

三花清順少細戶右少姓杉平大隅守務武

養子又太郎務實後源右後閩中人中務押務守

行教子三左弟右行政少細戶右為近江守廣傳

養子吾五郎廣道右九少細戶前田丹波守武宜

子要人孝思一橋郎用人壹後六郎右弟右易

金子幸太郎右合指揮右久貝忠左弟右

正貞子志二弟右正海後八少部右少部右少部右



き小納戸とあるおのく、康米三言俵及料子  
同くゆり

二十三日京智恵院 大僧正小任きくる新田

大光院謙倉光のち、一、鴻巣務新与新田大光

院へ増上与伴院大濱鴻巣務新与住職し、し

正

二十四日赤飯山

孝恭院殿靈廟、少老并伴言部、少補並朗代

系、大書、小粟精三郎、政胤、その与、頭と、き、くる

二十五日、小普請、福高、他、言、務、具、足、有、り、余

き、くる

二十七日、小普請、より、大書、より、力、の、十三人

二十八日、小納戸、酒井、他、系、の、政、長、夏、目、益、白、郎

信賢、田、沼、主、水、意、英、塔、又、十、郎、長、富、銅、倉、織、之

即、考、昭、祐、后、長、三、郎、長、庸、大、田、波、之、水、好、全、前

田、要、人、孝、思、久、具、志、三、郎、正、満、有、り、御、城、下、附、き



きつれ少姓平野景五郎 少納戸下従つる  
大書少林主石束門昌芳老先一少書後とれ  
り褒金を初ふ

二十九日三縁山

有章院殿靈廟一安後對多智信成代奉託

六月朔日月ふみの御祭例の如し津輕越中

吉寧親と母親す少納戸相平告く此山賢意後

幸三郎 少姓とある日の座五宮下の及あ

りいりハ侍中して謝中するその他も徳住  
職を謝し束巻を初む

二日先色筒以水野監物右晋火清俊とれり小

十人氏久和右次郎定安先色筒氏とれり船白

以筒井柱左弟の順亭少十人氏とあり腰相有

竹阿部劫左弟の正盈船手氏とあり又腰相納

戸大書より船城新書と稱る日の八人

三日船城少納戸系佐久左弟の務阜子孫とあり



勝明故田安郎甲人勤一券合和浦猪会系良  
昭子小姓組仙之巫美啓は一め父死して家  
つくとの十七人相平播磨守頼説その実父大  
田隆吉頼陽うきうきハ侍者曾根五郎吉房  
次彭して尋問せらる  
四日尾紀の多郎ハ侍して菓齋を二握つておく  
りせり

五日甲府勤番与次伊勢主事助貞候代官菅沼

弥五郎長昌大工裏門切手番の次と行

六日

大納言殿汚穢書は一めある一きよより儒臣林  
大守氏衛そのよりア一くさより汚書法ハ桑右  
孝組既在後吉左衛門五郎汚穢本一よりより  
よりたよをせり

七日番医山田宗系正照老免一して小普請より入  
寝舎をぬ



八日 东叡山

澄明院殿靈廟より大田備中守次良愛代系に

九日

澄明院殿高牌より安後對守信成代系に  
大高守元小幡次郎八高家養子隼人二五藝技  
より新より出され高家より乃き迄切米三  
百俵あり又与白く菓存二振つてをくくくる

十日 西城書院書院山田肥後守利素ハ本城より福

小姓組番頭永見伊豫守為貞ハ西城書院書院

奥小姓守本伊勢守守富ハ小姓組番頭とあり

十一日 臨時朝會あり松平大膳大夫有房始り

十九人小納戸吉松内記正吉病免一七奉合と

あり又小普請方田丸新九郎病免一七奉合と

十二日 三縁山

惇信院殿靈廟より詣りあり

十三日 濱園より詣りあり臨時朝會あり酒井



修理大夫忠貫リの就封の由あり。その二  
十七人修理大夫忠貫柳宗式部大輔以承平  
大権大夫昌言清言とす。供番大久保八郎在宗  
の右福養子在宗の次郎。水野少将元休  
養子主元典二九留書居相村千右衛門良  
尚養子徳三郎リ。初見のこの多し。  
十四日體の院清方敦野方の附の孝清水勅書  
紐院同一勅書とれる。この三人の成經物方よ

りを城より清の主の一人  
十五日山王初へ清側是部因幡書長貴して  
浪十枚を薦あり  
十六日赤祥傳の如  
十七日紅雲山  
侍宮へある對する書信成代多氏  
十八日土旺よ乃くは傳のともうまうのや  
り出者一と同日光の主も供して相をす



さうき回一子候きく及上増与方丈舎海  
同く生てまつりものして治起居を伺  
十九日多相書とれるとの十四人少納戸西尾元  
太郎政温少姓とれる少姓飯田友之助易並小  
納戸<sup>天</sup>三野桂十郎雄行玉田右四郎成忠幸西成  
より

二十日 東飯山

有住院殿書廟の治詣何の紀伊大納言治室

御妾後の男治子生誕ありしりハ少老井伊兵  
部少輔五洲西陣より、泰山下野守大裕一々  
ほうき

二十七日 小姓組皆川弁右衛門政彬腰物取り  
とある故敷之卯方附近習書根来茂右衛門  
吉政清水初書与郎とある。

二十七日 格姫君病きくをぬい給ふ丑刻の  
りようきあやういぬあま二よて音楽慶きく



・又三百餘り少老堀田接津書正敷して紀伊  
垂おを尋問せしるふハ湯出生の男湯子湯惚  
ト云てれり

二十五日ふくしの又よき一濁法言家存る諸  
諸書以諸物取布衣士まうりりし希し紀伊  
あ三家の方へ供まいつくし格姫君湯子湯  
縁院と法證をくくすの日垂おの方ゆき生  
誕有し男湯子くくきつをめしりりふ供して

吊慰をくく

二十六日冲縁院湯子あはれ日上野凌雲院にお  
くりゆいつく家合伊东初五郎祐吉その法會  
の中山の藝傍念をくく

二十七日書院書三留四郎お米の政晴老免し  
く小普請とれり褒念しつふ

二十八日暑中を尋問きくして増上寺へ捨  
書を流りつふ



二十九日名越の後<sup>政</sup>例の如く紀伊才助云治宝

卿喪明ふれハまう乃りまきまきよ侍あり

しを謝しきりて老臣の禍退てくる劫

定山普請より直城表右等とれるもの七人



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*







